

Ⅱ 外部支援を受けている教育活動報告

1. 教育の高度化・個性化支援－「教育・学習方法等改選支援」

総合経営学部 9件

休・退学の抑制を目指す学内学生支援システム
 産業社会のメンタルケアに向けて学際的教育の実践
 観光と福祉の融合による実践的な教育分野の開拓
 ホスピタリティを軸としたマナー教育の推進
 学生に親しまれる図書館づくりを一機能の向上と開館時間延長
 学生の地域活動支援拠点「地域づくり考房『ゆめ』」
 地域の教育力を活かした活力ある学生指導
 新入生に対する導入教育
 全学生必須のキャリアカウンセリングを軸とした個別支援

松商短期大学部 9件

職業意識を育成するための教養系カリキュラムの強化
 学生に親しまれる図書館づくり－機能の向上と開館時間の延長
 シラバスとナビゲーションの活用－学習方法等の改善－
 学生の地域活動支援拠点「地域づくり考房『ゆめ』」
 信州の食文化を通じた人間教育と学生による地域振興
 伝統文化を通じて豊かな人間性を育成する教育
 松商ブランドと少人数による教育・指導
 世代間交流による健康な地域社会づくりを目指して
 新入生に対する導入教育

2. 知の拠点としての地域貢献支援－「地域の子育て・ものづくり支援」

総合経営学部

申請代表 白戸 洋（教授）

・申請・

プロジェクト名：「まつもとタウンマップ」・「マザーズライフ」による子育て支援とまちづくり

連携・協力先の組織名及び部署名： 松本市子育て支援課、松本商工会議所

プロジェクトの目的：

本事業は、子育て中の親が、子どもと一緒に松本市街地を訪れ楽しめるように、ホームページ「まつもとタウンコンパス」に「マザーズライフ」を作成し情報を発信し、子どもや家族連れに優

しい「ユニバーサル・デザインのまちづくり」を進めることが目的である。具体的には、第一に、子育て中の親に様々な情報を提供することによって、市街地が親子の「居場所」となる環境を整備する。第二に街づくりに親子や子どもの視点を取り入れるきっかけをつくる。第三に、学生がホームページの作成・更新を通じて、地域の子育ての現状や課題を直接実感し、自らの問題として意識を高める機会とする。第四に、以上を通じて若者と地域住民による子育て支援や街づくりの実践的なネットワークを構築することを目指している。なお、ホームページは、「マザーズライフ」、多目的トイレ情報を掲示する「バリアフリー」、自然や水をテーマにした「自然」によって構成されている。

プロジェクトの内容：

「まつもとタウンコンパス」(http://www.matsu.ac.jp/matsumoto_u/u_net/town_compass/compass_top/town_compassu_top.html)は、学生のゼミナール活動の一環として平成18年度に作成され、毎年情報更新や充実が図られ、さらに新しい視点でテーマも追加される。「マザーズライフ」は、昨年度、飲食店情報や支援施設の情報が掲載され、本年度は、7名の学生が松本市子育て支援課や保育園、子育て支援グループ等と連携して「マザーズライフ」の更新に取り組んでいる。本年度はこれまで、直接子育て中の母親のニーズや課題を把握するために、アンケートやヒアリング調査などを実施しており、その結果の解析を踏まえ、市街地の調査等を行いホームページにその成果を掲載するとともに、子育てと街づくりというテーマによる研究会を関係機関の協力を得て開催し、子育てとまちづくりを具体的に結びつけるネットワークづくりを行う。さらに上土商店街を対象とした子どもに優しいモデル商店街づくりにも取り組む。また成果をまとめ、パンフレットを作成する。

地域への効果：

本事業の地域への貢献としては、第一に子育て中の親に具体的な街の情報が提供されること。第二に、例えば調査の実施や会議やイベントの参画、交流などを通じて、松本市役所が進める子育て支援ネットワークに学生が参画しその活性化を図ることができること。第三にホームページの作成を通じて、学生が連携・交流する商工会議所や商店街などのまちづくりに関わる団体・機関と松本市役所子育て支援課、子育て支援団体、子育て支援マガジン「イクジイ」編集部などの子育て支援の団体・機関を、事業を通じて結びつけ、実践的なネットワークを構築すること。第四に子どもに優しいモデル商店街づくりとして具体的な商店街の活性化が図られることである。

・報 告・

プロジェクトの成果：

① 実施した内容

- ・松本市子育て支援課や保育園、子育て支援グループの協力によって、子育て中の母親のニーズや課題に関するアンケートを約80名の子育て中の母親を対象として実施し、その結果をまとめた。また親子サークルの活動に参加したり、松本市の子育て支援センターへの訪問、保育園の保護者へのヒアリング等を通じて、ニーズや課題を把握した。
- ・またアンケート調査等の結果を踏まえ、親子連れに優しい街を目指した街作りをテーマとして、市街地の調査を3回実施した。
- ・その成果を松本市子育て支援課や松本商工会議所の協力を得て、2007年12月より合計3回にわたり、子育て中の母親や行政関係者、市街地の住民や商業者とともに研究会を開催し、まちづくりについて協議を行なった。その結果から、上土商店街をモデル地区として、子育てに優しいまちづくりに学生も参画して取り組むことになった。

- ・これまでの活動の成果については、2008年度秋を目処としてHP「タウンコンパス」を更新し掲載する予定である。なおタウンコンパスへの掲載については、当初年度内に実施する予定であったが、HPを全面的に改訂することとし、HP作成の講習会を2008年3月に2回にわたり実施した。

② 事業の成果

- ・アンケート調査等を通じてこれまで漠然としていた子育てをしている母親のニーズとそれを受け入れるまちづくりの現状や課題が明確になった。
- ・本プロジェクトを通じて、学生が媒体となって、まちづくりに関わる住民や商工会議所など団体と、子育て中の親や子育てを支援する行政関係者とのネットワークが構築された。
- ・上土商店街をモデルとして、子育て支援をコンセプトとしたまちづくりの取り組みが学生が参画して開始された。その結果、子育て支援サークル等の要望から、親子で街を歩き街に親しむことを内容とする、親子を対象とした「上土レトロラリー」を2008年6月に開催する予定である。

申請代表 尻無浜 博幸（准教授）

・申請・

プロジェクト名：福祉実習・ボランティア活動による障がい者の社会的・経済的自立支援

連携・協力先の組織名及び部署名：

山形村社会福祉協議会地域福祉部、宅幼小所「建部の里」、
知的障害者授産施設「共立学舎」、「信州フランス鴨の会」

プロジェクトの目的：

地域における学生の社会福祉実習やボランティア活動を通じ、学生を育てつつ、学生が参画した地域福祉や地域づくりを行なう。特に高齢者・障がい者の社会的・経済的自立を重視し、仕事作りとバリアフリー観光による社会参画の促進を目的としている。観光ホスピタリティ学科では、社会福祉士の育成など地域の福祉の向上に資する人材の育成を目指し、特に現場に学ぶことと現代的なニーズに対応できる人材育成を中心課題とし、平成15年度より山形村社会福祉協議会と協定を結び、「希望の旅」の実施などを行ってきたが、平成18年度には大学と社協が連携して本事業の拠点として宅幼小所「建部の里」を開設した。18年度からは、蕎麦の栽培やブルーベリー等の労働集約型の農業や農産加工業を活用した仕事作りとバリアフリー観光のモデル作りを実施している。本年度より、具体的なモデル事業を実施している。

プロジェクトの内容：

第一に高齢者や障がい者の仕事作りとして、蕎麦、黒豆、芋、ブルーベリー等の地域独自の農産品に注目し、栽培や加工、販売等をモデル的に行ない、就業機会の創出を図る。蕎麦や芋は栽培方法が比較的ハンディを持つ人々にも容易であり、またブルーベリーや黒豆などは付加価値が高い。いずれも比較的労働集約的作業を必要とし、収穫も細かな単純作業が必要となる。更にフランス鴨の飼育販売を進める共立学舎にも本年度より実習生を派遣し新しい品目についても取り組む。第二に社会的な自立を図るためにバリアフリー観光のモデル事業を山形村社協と連携して実施する。学生が企画・運営し、その成果を踏まえてバリアフリー観光のあり方を地域に提案する。これらの事業には、社会福祉の実習の一環として学生が通年でコーディネーターとして派遣され、またインターンシップやボランティアの自主活動としても学生が参画する。

地域への効果：

本事業の地域への貢献は、第一に高齢者や障がい者の就業機会について具体的な検討を行ない、実際のプロジェクトを立ち上げるきっかけとなることである。例えば本年度、夏に実施したブルーベリーの収穫では知的障がい者の持つ集中力と持続性が優位に働く可能性が見出されたが、大学の持つ専門的知見によって実施可能性が検討されることで、事業としての継続性が高まることが期待される。第二に担い手が減少する農業部門にとって、農地の保全や農業の継続は重要な課題であり、本事業が地域課題の解決につながることを期待される。第三にフランス鴨やそばなどの信州ブランドの確立など農業や観光という長野県にとっては重要な基幹産業の振興に資することが期待される。以上は地域への直接的な貢献であるが、本事業を通じて幅広く地域に根ざし、現代的なニーズに対応した福祉分野の人材を育てて、即戦力として地域に送り出すことが第四のより本質的な地域貢献である。

・報告・

プロジェクトの成果：

第一の成果について、モデル的な実証研究に着手したことによって、実績データが積み上がっていることである。具体的には、地域の蕎麦振興組合との協働で蕎麦畑を確保し、蕎麦育成の指導を受けながら、蕎麦の収穫を試みた。その過程において、作業内容や作業量に対して、どの程度の障がい程度が適応可能かなど知見できた。また、フランス鴨については、在宅障がい者向けの起業支援の取組みを始めた。ワークショップを開きながら、在宅で生活する障がい者の就労支援体制の構築を目論んでいる。ブルーベリーについては、地域の社会福祉協議会との連携で展開しており、黒豆については、地元の自治体との共同活動で取組みが継続中である。加工や販売の工夫が、障がい者・高齢者の保護雇用から一般雇用へパラダイム転換しつつある、工賃倍増計画支援へ活かされることになる。

第二の成果について、バリアフリー観光のモデル事業を先駆的に取組んでいる台湾の障がい者財団に学んでいる。地域への具体的な提案まで至っていないが、学生の企画・運営を有機的に育てていく目的で、台湾の障がい者財団と提携し、バリアフリー観光における学生ボランティア協定を結び、定期的にバリアフリー観光を実際に支援していくこととなった。このことによって学生の自発的な参画を促す環境が整ったことになる。

申請代表 眞次 宏典（准教授）

・申請・

プロジェクト名：学生が参画した松本駅西口のまちづくりと人づくり

連携・協力先の組織名及び部署名： 松本市田川地区、松本市巾上西区町会

プロジェクトの目的：

松本駅西口地区は平成15年より駅の整備事業と道路拡張が進み、高齢化率が60%を超える巾上西町会では、人口の3割が立ち退きとなり、コミュニティ崩壊の危機にさらされた。これに対し、住民による主体的なまちづくりが始まり、①景観の保護等「アルプスの景観を守る」、②日常生活に必要な店舗整備やバリアフリー化等「高齢者安心して暮らせる」、③地区を流れる田川の活用や交流拠点の整備等「人の交流する」ことを掲げた。さらに本年4月には学生の支援によって、交流拠点としてコミュニティ蕎麦屋「いばらん亭」が地域づくりの拠点として開設された。本事業はこの

ような住民が進めるまちづくりに学生が参画し、観光ホスピタリティ学科の学生の専門性を活かした調査や実践活動を行ない、学生の視点でまちづくりに貢献するとともに、事業を通じて学生をまちづくりの担い手として育てることをめざすものである。

プロジェクトの内容：

本事業は、①アルプスの景観を守る街づくりについて、景観に関する住民協定の締結に向けての調査や研究会やまちづくりワークショップ「まちの縁側づくり」の実施、②高齢者が安心して暮らせる街づくりについて、ハード、ソフト両面のバリアフリー化と店舗の整備等高齢者の生活を支える基盤づくりに向けてのフィールドワークやニーズ調査の実施、③人の交流する街づくりについて、「いばらん亭」の事業支援や田川の環境を整備し活用する観光拠点づくりの検討、昔ながらの街らしい店舗の誘致や空き家を活用したＩターン支援のための「駅前クライナガルテン」事業の計画づくりを行なう。地域住民の取り組みをフィールドワークやアンケート調査、ワークショップの開催など学生が得意な分野を通じて支援を行なうものである。本事業のコーディネーターとして社会福祉実習の学生が社会福祉協議会を通じて派遣され、セミナー活動などの一環としても学生が参画する。

地域への効果：

本事業は地域住民が取り組むまちづくりに学生が継続的に参画するものである。したがって、本事業の地域への貢献は、第一に、若い世代である学生がまちづくりに参画することで、地域住民が勇気づけられ、刺激を受けることで、まちづくりへの取り組みそのものが活性化することであり、高齢化が進む地域社会において学生がまちづくりにおいて重要な役割を果たすことが期待される。地域の中でそこに住む住民では言い出しにくいことでも、若者が提案することによって地域に認められるなど若者の持つ特性がまちづくりに活かされることが期待される。第二に、本事業における住民との交流や協働を通じて、参画した学生が、単に研究や勉強のためだけにまちづくりに傍観者として関わるのではなく、自らも一人の主体者として関わる意識を醸成し、将来の地域づくりのリーダーを育てることが可能となる。

・報告・

プロジェクトの成果：

① 実施した事業

- ・2007年8月に地元田川地区まちづくり推進協議会と学生によって、アルプスが見える景観の保全をテーマにしたフィールドワークとその結果のとりまとめのワークショップを実施した。また講義の一環として学生によるフィールドワークを6回実施した。
- ・2008年2月及び3月に田川地区を対象として、まちづくりワークショップ「まちの縁側づくり」を愛知工業大学大学院の延藤教授をコーディネーターとして実施した。
- ・2007年6月にスズキセニアカー販売の協力の下にセニアカーの体験試乗会とバリアフリー調査を実施した。
- ・住民有志によって2007年4月に開店した「いばらん亭」の事業について、イベントの企画運営や商品開発、広報などに関し学生が支援を行った他、健康栄養学科の教員による商品開発の支援を行った。

② 事業の成果

- ・学生が参画しての景観保全の取り組みは、松本市を動かし、景観条例が2008年4月に施行された他、地域内に事業所を開設した企業が、景観に配慮した看板を設置するなど、アルプスの景観は守られ、市街地の景観保全の先進的な取り組みとして評価されている。

- ・ 4月に開店したいばらん亭は、学生が地域の住民と交流する場として定着し、まちづくりの拠点として新たな事業が創出されている。
- ・ まちづくりに学生が参画することで、実際の具体的なまちづくりを体験することが可能となり、社会福祉実習やゼミナール活動、講義などの質の充実が図られた。
- ・ 高齢化した地域において若い学生が参画することは地域の活気を創出することにつながり、まちづくりが大きく進展をした。将来の街を託す若者が直接的にまちづくりに関わることで、高齢者が主体の地域における将来の不安を払拭することにつながった。

人間健康学部

申請代表 小松 昌久（専任講師）

・ 申 請 ・

プロジェクト名： 地域における障がい児へのスポーツ活動支援（Having Nice TimeProject）

連携・協力先の組織名及び部署名：

信濃医療福祉センター

プロジェクトの目的：

障がい児を抱えた家族は、「子供にスポーツをさせたいが、どうしたらよいかわからない」「定期的にスポーツをする場所が欲しい」といった悩みや願いをもっている。社会において障がい者スポーツは一般的になっているものの、多くは、社会人のための活動である。

今回このプロジェクトを企画した目的は、①障がいを持った子供にチャレンジするチャンスを作る②地域に暮らす仲間たちとのつながりを作るということである。また、本事業を遂行するに当たり本学学生がスポーツ・レクリエーションプログラムなどを実施する。これにより、教員としてまたは地域のスポーツ指導者としてのキャパシティが広がることを確信している。この活動を通し、誰もが「楽しい時間を共有する」喜びを持っていただくことが最大の目的である。

プロジェクトの内容：

プロジェクトでは、定期的な活動を通し、①レクリエーション・スポーツ活動を通して体を動かす喜びを知る②レクリエーションから競技スポーツへの導入を行い、「生涯スポーツ」の発見を行う③必要に応じ競技スポーツへの移行・指導を行う④学生がスポーツ指導を通し、障がい者の運動特性に気づきながら、指導内容・方法について学習するとともに、コミュニケーション能力も身に付ける。⑤学生は、スポーツ指導を行うために、授業やクラブ活動を通して、障がい者への対応を学ぶ。

この事業を通し、家族も車椅子の子どもと一緒に楽しむ、当事者の友人が来て一緒に楽しむという機会を作り「楽しい時間」を共有することを可能にすることができるだけでなく、スポーツに対する興味も深まることが期待できる。

地域への効果：

地域に暮らす障がい者のスポーツの底辺の拡大を図ることが可能である。またこの活動では、本人を取り巻く人たちの参加により、障がい者に対する理解を一層深めることとなる。この効果により、障がい者スポーツはユニバーサルスポーツとして広く一般に普及できるものである。（車椅子

等の利用により立位が不安定な方なども安全に楽しめる) 本プロジェクトの長期継続により、やがては子供たちが指導的立場になり、新しい障がい者を支えていくという構造ができることが理想である。まさに自立が期待できる。

・報告・

プロジェクトの成果：

次年度以降の事業展開のための準備期間とした。

関係機関においてアンケート調査を行い、スポーツに対するニーズなどはあるながらも、機会がなかなか得られないなどがわかった。